

正月三が日は生憎の悪天候で、授与品が風に飛ばされないとヒヤヒヤでしたが、寺務員さんや助勤さんの機転で無事に乗り切れました。有難や有難やです。今年もたくさんのお詣りがあり（まだ旧正が残っているので、継続中ですが）、賑やかなお正月となりましたこと、謹んで感謝申し上げます。

境内の梅古木 良啓

寺務所前に梅の古木があります。伯父曰く、元首里市長宅から譲り受け、樹齢百年になるそうです。毎年、この時期に甘い香りと白い花を咲かせ、寺務所に爽やかな春の訪れを感じさせてくれます。

沖縄では、この時期の花と言えば桜ですので、お寺の梅を見た人が、「さ、桜ですか??」と自信なさそうに問合せされます。「いえ、梅です」とお答えすると、「初めて見ました。」という様な会話が続きます。

その様に珍しい梅にまつわる話ですが、名護市源河の大湿帯地区の梅林に行ってきました。以前から綺麗だと知っていたのですが、やっと行くことが出来ました。やはり、お寺の一本だけと違い、たくさんの方が群生しているの、香りがとても素晴らしかったです。甘く爽やかで、何度も深呼吸してしまいました。一面白の世界も上品でした。

今でこそ、「花と言えば桜。桜は日本人の心！」などと親しまれていますが、実は万葉の時代は、その地位は梅でした。この時代、文化の先進国である中国大陸



では梅が高貴な花として君臨していました。また、寒い冬が終わり暖かい春の訪れと共に開花すると言うタイミングが良く、万葉集で一番歌われる花は梅で百種以上、桜は五十程度と言う人気でした。そう言えば、平安初期に活躍した菅原道真公も梅が大好きでしたね。ちようど今、境内の梅のつぼみが開花しそうですので、お時間ありましたら、参拝後に梅花鑑賞は如何ですか？

ウガンブトウチ 寺務員 西川

まだ寒さは残りますが、立春が近づき、少しずつ春の気配を感じるころとなりましたね。

沖縄の家庭では、年の終わりに火の神・ヒヌカンが天へ昇り、一年の歩みを神々に伝えるといわれています。昇天の日には、「今年もありがとございました」と感謝の気持ちを込めて手を合わせてきました。

新しい年を迎える頃には、火の神迎えの日が訪れます。再びヒヌカンをお迎えし、これからの一年の無事を願います。

火は、日々の食事を支え、家族をあたためてくれる暮らしの中には欠かせないものです。ヒヌカンは、そんな毎日をそつと見守る神様だといわれています。

本年のヒヌカン昇天の日は、令和八年二月十一日（旧暦十二月二十四日）にあたります。

本年の火の神迎えは、令和八年二月二十日（旧暦一月四日）にあたります。

当寺では、この火の神迎えの際にお使いいただく【ヒヌカン札】をご用意しております。手を合わせる時間が、心を落ち着かせるひとときになれば幸いです。

寒さの残る二月。あたたかな火と、感謝の心を忘れずに穏やかな日々をお過ごしください。



ヒヌカン札 500円